

**詩篇 23 篇 後編**

## 導入

先週、私たちは詩篇 23 篇 1-3 節を学びました。その内容を少し振り返ってみましょう。ダビデが記したこの詩篇は、羊飼いと羊についてですが、ここでは立場が逆転しており、ダビデが羊です。羊飼いは主ご自身です。

主イエスと直接つながることはとても大切です。イエスとの絆があれば、私たちの必要は主がしっかりと備えてくださいます。私たちは、人生を神に喜んで委ねなければなりません。

神は御子イエスをとおして、私たちのたましいの救いを備えてくださいます。また、人生で直面するあらゆる状況にも対応してくださいますし、私たちの終着地である天国も備えてくださいます。また、イエスは争いや恐れ、苛立ちなどから解放された平安な人生を与えたいと願っておられます。そして、みことばによって霊が養われることを望んでおられます。

神は、私たちの信仰を成長させるために、常に私たちを前進させられます。そこにはあらゆる課題があり、そのたびに、神を信頼し、さらにイエスに似た者とされるチャンスがあります。

人は生きていれば、傷つき落ち込むことがあります。このようなとき、私たちは仰向けになってしまった羊のように、自分で起き上がることができません。神は人を用いて、私たちの霊性を引き上げ、立ち直らせてくださることがあります。元気をなくした人を助けるためには、私たちは聖霊の導きに従う必要があります。

神は、ご自身の栄光のために私たちを導いてくださいます。私たちには、神の道に従う従順が問われます。神があらゆる道へと私たちを導かれるのは、私たちのためであり、神の栄光のためであり、神が手を差し伸べようとしておられる人々のためでもあるのです。ここまでが先週学んだことのおさらいです。

今週は、詩篇 23 篇 4 節から始めましょう。

「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。」

(羊飼いの守りを受ける。)

羊飼いの視点では、ここがこの詩篇の折り返し地点です。ここからは、羊飼いと羊との間の愛情あふれる親しい会話となります。

イスラエルでは、夏の間、羊飼いは羊を丘陵地帯や山の上に連れていきます。良い牧草地を得るためです。羊飼いは常に羊と過ごします。羊飼いは、谷を越えて羊を山頂へと率います。夏には、雷を伴う嵐があります。これは死の影の谷のように思えるでしょう。山頂への途上にはあらゆる危険が潜んでいます。がけ崩れや毒草、オオカミもいます。それでも、羊飼いが一緒にいるので、羊は安全です。

羊飼いが持っていたのは、「むち」と「杖」だけです。「むち」は、羊飼いが自分で入念に選んだものです。

羊飼いは子どものころから「むち」の使い方を学びます。「むち」は、小さな木を引き抜いたものの場合もあれば、木を削って造られた先端に取っ手のあるものの場合もあります。この取っ手は非常に硬く、使い方次第では人間に致命傷を与えられるほどです。

「むち」は、羊飼いが羊を数えたり調べたりするのに使われました。

エゼキエル 20:37 わたしはまた、あなたがたにむちの下を通らせ、あなたがたと契約を結び、

羊飼いは「むち」を使って、羊の毛をかき分け、病気やけが、欠陥がないかを調べます。当時の羊飼いは、自分の羊をすべて細部まで細かく調べました。

「杖」はこれとは異なる道具です。「杖」は長い棒の先端が傘の取っ手のように曲がったものです。

出産した母親羊と赤ちゃんが別々になってしまった場合、羊飼いは「杖」を使って、生まれたばかりの赤ちゃん羊を持ちあげ、母親羊のもとへ連れていきます。これは、羊飼いの手の匂いが赤ちゃん羊についてしまうと、母親羊が子育てをしなくなる可能性があるからです。「杖」はまた、迷い出した羊を連れ戻したり、羊を誘導したりするのに使われます。羊を誘導する際、羊飼いは「杖」で羊を叩くことはしません。羊の腹部を「杖」で少し押して優しく誘導します。

羊飼いが「杖」を使う様子はとても親しい関係を示します。愛し合う二人が手を取り合うのに似ています。

## 適用

この個所から、イエスとともに人生を歩む私たちは何を学ぶことができるでしょう。

まず、人生の旅路は容易いものではないということです。私たちの注意を惹き、道から逸れさせて、破滅させようとする悪魔がいます。けれども、イエスが私たちの羊飼いなら、悪魔を恐れる必要はありません。

とは言え、主の「むち」や「杖」を活用しなければなりません。私たちにとって、これらはどのようなものでしょう。

1. 「むち」は神の語られるみことばです。私たちを取り扱われる神の御旨です。羊飼いだっただモーセに、神は呼びかけられました。そのとき、「むち」を使って神に与えられた力を示すようにと語られました。神の御力をパロに知らせ、エジプトにいた神の民を安心させるためにも用いられました。

私たちは、神のみことばである聖書を人生のどんな場面でも信頼することができます。イエスは、神のみことばを用いて悪魔に打ち勝たれました。私たちも同じようにできます。（マタイ 4 章参照）

2. 「むち」は神による懲らしめやしつけを意味します。羊が毒草を食べようとしたら、羊飼いはすばやく「むち」を投げつけ、羊がそこから退くようにします。聖書も私たちを教え、しつけてくれます。神はご自身の愛する者を懲らしめしつけられるのです。

3. 「むち」が用いられる 3 つめの方法は、「親しいきよめ」と呼ぶものです。

詩篇 139:23-24 はこう語ります。「139:23 神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。139:24 私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。」

詩篇 66:10 は、神が私たちを銀のように練ってくださると語ります。金や銀が不純物を取り除くために精錬されるように、神も私たちを練られます。それは、私たちがイエスと似た者とされるためです。

羊飼いの杖は、私たちにとっての聖霊と言えます。苦しい時に私たちを守り慰めてくれます。聖霊を表すギリシャ語の単語は、寄り添って慰めてくれる人を指します。聖霊は私たちの慰め主です。

例：15年ほど前、私は教会の宣教チームとロンドンで奉仕をしていました。私たちは屋外で子供向けの伝道活動をしていました。そこは、犯罪者や低所得者がたくさん住む高層マンションの前の芝生の上でした。9歳くらいの少年が、私たちの集会に集まっていた子どもたちに向かって石を投げ始めました。だんだん大きい石を投げってくるようになり、子どもばかりか大人までも大けがをしかねない状況でした。

私はその男の子を捕まえて、石を投げるのをやめないと母親に言うと言いました。男の子はすぐに走って逃げました。私は、やれやれ一件落着いたと思いました。15分ほどすると、体中に入れ墨の入った大柄の女性が私のところにやって来ました。彼女は私を口汚くののしり、私が彼女の息子をいじめたと言いました。私は状況を把握する間もなく、この女性から顔面にパンチを食らって倒れました。このとき、私は聖霊の慰めを深く感じました。地面に倒れながらも、神の聖霊に慰められるという貴重な体験をしました。

辛い経験をするとき、神の聖霊はともにいて、私たちを慰め励ましてくださいます。

この世での人生で恵みに与る時があり、後には天国での祝福を得ますが、そこにたどり着くまでに死の影の谷を経験します。クリスチャン人生には祝福の山々に挟まれた深い谷があります。主イエスは、祈りとみことば、そして聖霊の慰めをとおして、私たちのそばにいて助けてくださいます。

では、5節に進みます。「私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。」

この時点で、羊たちは夏の旅路のどの辺りにいるでしょう。

羊たちは山頂に近づいています。夏の牧場です。いわゆる高原です。牧羊の盛んな国では、このような地域を「メサス」と呼びます。これはスペイン語でテーブルを指す単語です。この単語は、アフリカの国々でも使われています。ダビデはここで、夏の牧場全体について語っているようです。

羊飼いは常に羊の前を進み、場所を整えます。牧草の良く茂ったエリアを見つけ、毒草がないか、獣がないか、確認します。

羊飼いは、羊の鼻に塗るために十分な油があることも確認します。羊にとって、鼻にたかるハエはやっかいな存在です。ハエは羊の鼻にとまって産卵しようとするからです。油はそれを防ぐ役目を果たします。

この個所で明らかにされているのは、ダビデが考えていた4つのことです。

それは、敵、食卓、油注ぎ、そして杯です。

1. ダビデは、自分の敵について考えていました。

ダビデには、たくさんの敵がいました。彼の半生は敵から逃げる逃亡生活でした。ダビデにとっての最大の試練は、自分自身の息子が敵になった時でしょう。神に油注ぎを受けた者である彼は、自分が敵から狙われる身であることを承知していました。

私たちも、クリスチャンになって主イエスを自身の羊飼いとして迎え入れると、敵ができます。聖書は、私たちの敵はおもに3つだと教えます。この世、肉、そして悪魔です。

#### a)悪魔

ペテロ第一 5:8 は次のように語ります。「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」

悪魔とその巧妙な策略を認識する必要があります。悪魔は、私たちの考えに働きかけます。コリント第二 10:5 でパウロが「すべてのはかりごとをとりこにしてキリストに服従させ」なさいと警告したのは、こういうわけです。

悪魔の常とう手段のひとつに、否定的な考えを私たちに持たせるというのがあります。人に嫌われているとか、よく思われていないなど、ありもしないことを私たちにささやきます。また、クリスチャンを分裂させようとやっきになります。ですから私たちは、その手に乗らないよう努めなければなりません。

#### b) この世

ここで、ふたつの聖書箇所をご覧ください。ひとつめはヤコブ 4:4 です。

「4:4 貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」

次にヨハネ第一 2:15 です。「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」

これらの箇所は、私たちに大きな課題を投げかけます。私たちはこの世に流されてしまわないように気をつける必要があります。この世は常に、神に敵対します。聖書は、悪魔がこの世の支配者であると語ります。神は主権者なるお方であり、ご自身の目的のためにあらゆる物事をお用いになりますが、私たちの心がこの世のものを慕い求めることがないように注意しなければなりません。この世のものが私たちの心を満たしてくれることはありません。

#### c) 肉

ペテロは、ペテロ第一 2:11 で、「たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。」と警告します。

男性も女性も同様に、肉の欲に屈しないよう気をつけなければなりません。

誘惑に負けないようにする最善策は、羊飼いのそばにいます。そうすれば、必ず誘惑を避ける道を与えてくださいます。

## 2. ダビデの食卓

ダビデの食卓は、敵の存在に関係なく神が備えてくださるものです。サムエル第二 17:1-4 を読みましょう。17章では、アヒトフェルが自殺を図り、ダビデの友人がダビデにおいしい食事を与えたと書かれています。

17:1 アヒトフェルはさらにアブシャロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜、ダビデのあとを追って出発し、17:2 彼を襲います。ダビデは疲れて気力を失っているでしょう。」

私が、彼を恐れさせれば、彼といっしょにいるすべての民は逃げましょう。私は王だけを打ち殺します。17:3 私はすべての民をあなたのもとに連れ戻します。すべての者が帰って来るとき、あなたが求めているのはただひとりだけです。民はみな、穏やかになるでしょう。」17:4 このことばはアブシャロムとイスラエルの全長老の気に入った。

#### 適用

私たちクリスチャンも、疲れてくじけそうになることがあります。敵の攻撃を四方八方から受けるからです。しかし神は、私たちの人生をご自身の御手にとり、私たちの敵を滅ぼして、悪い状況から良い結果をもたらすことがおできになります。ヨセフの人生について読めば、神がご自身のご計画にそって遅れることなく働いておられたことが分かります。ヨセフの人生に起こった数々の困難を、神はご自身のご計画のために用いられました。神は、私たちの人生に起こる苦難も、ご自身のご計画のために用いてくださいます。人生がうまくいかないときにも、私たちは神とみことばを信じましょう。

### 3. ダビデの油注ぎ

ダビデは、神の油注ぎを受けた祝福について考えていました。聖書を読むと、注ぎの油の重要性がわかります。出エジプト記 29-30 章には、祭司が聖別されたしるしとして油を注いだとあります（出エジプト 29:7）。この油はどんなものでもよいわけではありません。このために特別に用意されたもので、聖なる油でした（出エジプト 30:31-33）。

ダビデは、イスラエルの王として油注がれたときのことを思い出していたのでしょう。サムエル第一 16 章 1 節と 13 節を読みましょう。

16:1 【主】はサムエルに仰せられた。「いつまであなたはサウルのことで悲しんでいるのか。わたしは彼をイスラエルの王位から退けている。角に油を満たして行け。あなたをベツレヘム人エッサイのところへ遣わす。わたしは彼の息子たちの中に、わたしのために、王を見つけたから。」

16:13 サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中で彼に油をそそいだ。【主】の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った。サムエルは立ち上がってラマへ帰った。

これについては、詩篇 89:20-21 にも記されています。

89:20 わたしは、わたしのしもべダビデを見だし、わたしの聖なる油を彼にそそいだ。89:21 わたしの手は彼とともに堅く立てられ、わたしの腕もまた彼を強くしよう。

油は、ダビデが神のしもべとして聖別されたことを象徴しました。神のご臨在を約束し、ダビデが召された働きを成し遂げる力を与えるものでした。また、神が責任をもってダビデを守るという意味もありました。

#### 適用

皆さんは、この油注ぎと同じテーマが新約聖書にも登場し、すべてのクリスチャンに当てはまることだにご存じだったでしょうか。ヨハネ第一 2:26-27 を読みましょう。

2:26 私は、あなたがたを惑わそうとする人たちについて以上のことを書いて来ました。2:27 あなたがたの場合は、キリストから受けたそそぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません。彼の油がすべてのことについてあなたがたを教えるよ

うに、——その教えは真理であって偽りではありません——また、その油があなたがたに教えたとおりに、あなたがたはキリストのうちにとどまるのです。

使徒ヨハネの時代には、神の民を欺こうとする人々がいました。彼らは、違う福音を広めようとしていましたが、この福音は真理ではありませんでした。ヨハネは、新しく生まれ変わった人は聖霊の油注ぎを受けていると教えました。聖霊は、「真理」の御霊です。

聖霊は、クリスチャンに油を注ぎ、さまざまな目的に用いられる賜物を与えます。私たちは皆大切な存在で、一人一人に神のご計画のうちに果たす役割があります。神は皆さんのためにもご計画をお持ちです。そして、その役割を皆さんが果たせるように力を与えてくださいます。

#### 4.ダビデの杯

ダビデは、「私の杯は、あふれています」と言いました。これはどういう意味でしょう。神の祝福があふれるほどに人生に満ちているということです。ダビデには、不平不満を言う材料はいくらでもありました。けれども、自分の置かれた状況ではなく、神のすばらしさに注目することをダビデは選んだのです。

イエスは神の怒りの杯を飲み、私たちの罪の罰を負って十字架にかかって死んでくださいました。そのおかげで、私たちもダビデのように、救いの恵みに目を向けることができます。神の怒りはイエスに注がれました。私たちはもはや、罪の罰に苦しまなくてよいのです。

私たちも詩篇の著者とともにごう言えます。「【主】は、私へのゆずりの地所、また私への杯です。」詩篇 16:5

自分の杯は空っぽだと思えても、それでよいのです。神がその杯を満たしてくださいます。あなたの杯があふれているなら、周囲の人々に祝福を分けましょう。私たちは、まだイエスを知らない人々に証をする必要があります。

では、詩篇 23 篇の最後の一節に進みましょう。「まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、【主】の家に住まいましょう。」

羊たちはどこにいます。羊は冬に過ごす家畜小屋に安全に戻りました。暖かい干し草の上で眠っています。獣が襲ってくる心配はもうありませんが、それでも羊飼いは羊の世話を続けます。

6 節は、このすばらしい詩篇の締めくくりです。

ダビデは、「いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう」と言いました。ここでダビデが使ったヘブル語の単語は「追いかける」や「追跡する」などを意味する非常に強い語調の単語です。羊飼いが羊の群れを連れていくところには必ず、いつくしみと恵みが追いかけてくるといったイメージです。

あるスコットランドの羊飼いは、二匹の牧羊犬がいました。羊たちの見張りや誘導をするよう訓練されたボーダーコリーです。ボーダーコリーは昔から牧羊犬として知られています。羊飼いはこの二匹を「いつくしみ」と「恵み」と名付けました。羊が群れから離れていこうとしても、この二匹の犬が両サイドから羊を挟んで群れのところに連れ帰ります。

私たちは、良い羊飼いであるイエス・キリストに目を向けていなければなりません。そうすれば、いつくしみと恵みとが私たちをあるべき状態に保ってくれます。

## ヘブル 12:1-2

12:1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。 12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

イエス・キリストに目を向けていれば、いつくしみと恵みとが私たちから離れることはありません。先ほどお話した二匹の牧羊犬のように、羊飼いであるイエス・キリストに注目するよう助けてくれます。

この詩篇はすばらしい約束で締めくくられています。今ではなく、将来を約束するものです。

ここにはあらゆる国籍の人たちがいます。イギリス人、アメリカ人、韓国人、日本人、フィリピン人などさまざまです。しかし、イエスが私たちの羊飼いなら、私たちは皆、天国の国民です。私たちには天国への入国を許可されたパスポートが与えられています。その許可書は尊いイエスの血潮によって証印を押されています。イエス・キリストが私たちの代価を支払ってくださったので、私たちに天国で過ごすすばらしい将来があります。

「主の家」というフレーズは旧約聖書に度々登場します。これはたいてい「神殿」を指します。詩篇でもそのように用いられます。詩篇 122:1 にはこうあります。「人々が私に、『さあ、【主】の家に行こう』と言ったとき、私は喜んだ。」

神殿はさらに偉大なものの前触れに過ぎませんでした。神殿の目的は、私たち自身の罪深さと神の聖さを教えることでした。ヨハネが黙示録 21:22 で天国を見た際、そこに神殿は見えなかったと語ります。そこには、主の家と呼べる建物はありません。ヨハネは、主なる全能の神と小羊が天の神殿であると言います。

偉大なる羊飼いイエスは、私たちの人生の終わりに主のご臨在の栄光へと私たちを連れて行ってくださいます。そこには病気も涙も悲しみも死もありません。イエスがすべてを新しくしてくださるのです。

黙示録 21:27 は、小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが天国に入れると語ります。主イエス・キリストが罪から救ってくださったと信じているなら、あなたの名はその書にあります。もし、まだ信じる一歩を踏み出していないなら、今日誰かと話してみてください。または誰かと祈ってください。神があなたの心に語りかけておられると感じるなら、その時をどうか逃さないでください。